

親と子の関係

1. メジロとシジュウカラのヒナ

メジロ、シジュウカラともに打吹山で年中見られ、ヒナに出会う機会も多い鳥です。シジュウカラは人工物の隙間や穴に営巣することが多く、公園や市街地でもよく見ます。メジロは小さな深皿の巣を枝の分かれ目に付けるのですが、実にうまく葉で隠して秋の落葉後まで気付きません。



シジュウカラの幼鳥



シジュウカラの成鳥

ヒナは数羽が絶えず鳴きながら集団で移動しますから目につきますし、巣立ち直後は親が周囲で警戒していることでもわかります。特にメジロは、親がくちばしをパチパチと鳴らしてヒナを人から遠ざけようとするため、存在がわかります。

巣立ちしたヒナは、産毛は無くなっているのですが、成鳥の羽色に比べると全体に淡い感じがします。シジュウカラでは、頬の白い部分の輪郭がボケていることや、腹の黒帯が薄いことですぐわかります。メジロでは、腹の両側の茶色や中央の黄色の帯がはっきりしません。親子が識別できれば、いつまで親が子の面倒を見ているかを知ること可能です。給餌するだけでなく、しばらくは保護を続けます。

ヒナは8月になると換羽を行い、幼羽から成羽へと変わります。行動もヤマガラやエナガ、コゲラなど他種も混じった集団を作り、採餌しながら移動するようになります。



メジロの空巢

2. 種子の落下場所と発芽 (No.111 芽生え 参照)

「利己的な遺伝子」という表現があります。遺伝子は自分のコピーを多く残すように進化してきたという学説です。他種間の競争ではなく、同種の中に自分を多く残すことです。

植物が種子を散布するとき、親との競争を避けるため遠くに運ぶという手段が取られていることは、翼や冠毛をもつ種子の説明に使われます。また、一度生えたら何百年も動けない樹木には、液果やどんぐりをつけるものがあります。これらは親木の下に落下した後、動物等に食べられて運ばれることになっていますが、打吹山では親木の下に落下したままになっているものを多数見かけます。これらと親木との関係はどのようになっているのでしょうか。

親子関係がわかるように同種が集まっていない孤立している木を見つけて調べてみました。親木が広げた枝の範囲の下に実生が存在したのは、モッコクとイヌマキがそれぞれ1個体、タブノキとオオモミジは0でした。シラカシ

オオモミジの樹下に
1本の幼樹もない

は9個体ありましたが2年生までで、それ以上大きくなった実生は親の範囲の外でした。光が足りなくて成長できないのではありません。他種の下では生育しているのです。親が発芽や成長を抑制している可能性があります。畑では同種の連作は成長が悪くなる「嫌地」という現象がありますし、マツの落ち葉には稚樹の成長を抑制する物質が含まれているとのこと。種間、種内で競争の結果が現在の植生です。

イロハモミジ実生
この後、枯死ヒノキ実生
障害のない裸地